

令和4年度(第77回)文化庁芸術祭賞贈賞理由

演劇部門

芸術祭大賞 (関東参加公演の部)

株式会社萬狂言

「祖先祭 初世野村万蔵生誕三〇〇年」の成果

多彩なゲストとともに野村万蔵家一門(萬狂言)が総力を結集した本公演は、翁と狂言風流、定評ある古典的名作、独り狂言、賑やかな大勢物と多彩な演目を取り揃えて観客を大いに楽しませた。なかでも九世万蔵新演出による「千々尉風流萬之式」は、万蔵家由来の酒をテーマとした遊び心が溢れていた。ベテラン、中堅、若手と役者陣も充実し、過去から現在に至る歩みを振り返ると同時に、豊かな未来への期待が高まった。

<受賞者コメント：萬狂言 代表 野村 万蔵>

この度は文化庁芸術祭において栄えある賞をいただき誠にありがとうございます。当年初世から今日まで300年、数多くの苦難を乗り越え、絶えることなく芸を磨き、心という糧を繋いできた祖先への感謝と報告の舞台を、多くの皆様楽しんでいただけました事、尚且つ賞まで受けました事、祖先へのこの上無い報告となりました。これもひとえに能楽界を代表する出演者をはじめ関係各位及びスタッフの協力あつての賜物です。心より感謝いたします。これからの未来へ向けて一層の励みとなりました。



芸術祭大賞 (関西参加公演の部)

松竹株式会社南座

「女の一生」の成果

主演の大竹しのぶの演技は、遠慮がちな少女から強い女性へと変化していく様が自然で滑らか。俳優陣の人物造型も的確で、豊かなアンサンブルを見せた。また、段田安則のテンポの良い演出は舞台全体を引き締めた。人はいつの時代も悩み、喜びなどと共に生きていく。戯曲の普遍性も示し、総合的に高い成果をあげた。

<受賞者コメント：松竹株式会社 演劇本部長 山根 成之>

この度、携わってくださった、全てのキャスト、スタッフ、そしてご観劇くださったお客様の御蔭をもちまして、芸術祭大賞を受賞することが出来ましたことに心より感謝申し上げます。『女の一生』は、昭和20年4月終戦直前に松本薫さんが書き下ろし、杉村春子さんの主演により初演され、その後、杉村さんが生涯で947回にわたって主人公の布引けいを演じられた、日本を代表する演劇の一つといっても過言ではない不朽の名作でございます。今回は主人公・布引けい役の大竹しのぶさんを始めとした、華やかで実力も兼ね備えた俳優の皆様が集結いただき、卓越した演技で魅了してくださいました。今後もお客様にお喜びいただける舞台芸術をお届けできるよう務めてまいります。



芸術祭優秀賞 (関東参加公演の部)

松竹株式会社歌舞伎座

芸術祭十月大歌舞伎第一部「荒川十太夫」の成果

「忠臣蔵」の外伝物である神田松鯉口演の講談が原作の新作歌舞伎。赤穂義士・堀部安兵衛の切腹で介錯をした松山藩の下級武士・荒川十太夫の義を通そうとしたがゆえの葛藤が藩主ら周囲の人物との関わりの中で描かれる。構成がしっかりとし、尾上松緑の十太夫を始めとする俳優が的確な演技を見せ、再演に耐えうる佳品となった。

<受賞者コメント：松竹株式会社 専務取締役 山根 成之>

この度は歴史ある賞を頂き、心より感謝申し上げます。講談の名作『荒川十太夫』を新作歌舞伎として上演するにあたり、講談の空気感を大切に、且つ台詞や動きの細部に渡るまで擬古典の雰囲気を出せるよう検討を重ね、長年にわたって再演されるような完成度を目指して参りました。今回受賞できましたことは誠に感慨深く、尾上松緑さんをはじめとする出演者、そして初めて歌舞伎作品の演出を担ってくださった西森英行さん、スタッフ、関係者の成果だと感じていると共に、神田松鯉、神田伯山両先生や多くの皆様のご協力賜物と改めて御礼申し上げます。



令和4年度(第77回)文化庁芸術祭賞贈賞理由

演劇部門

芸術祭優秀賞 (関西参加公演の部)

劇団未来

「劇団未来 パレードを待ちながら」の成果

戦争では女性も戦っている。第二次大戦中のカナダが舞台。銃後に残された彼女達は強ばった世間の中で、愛する者がいない孤独に耐えて行く。5人の女性が各々の問題に悩み、衝突し、励まし合う、名誉を求める男達を冷ややかに見つめながら。仕事と演劇活動を60年間両立してきた劇団の志と蓄積が、力強い舞台を創り上げた。

<受賞者コメント：演出者 しまよしみち>

1962年創立した劇団未来は2022年9月2日に60周年を迎えました。創立から55年代表を務めた森本景文は5年前に急逝、しかし今も80歳を越えた2名の創立メンバーが在籍し活動しています。「働きながら演劇を創り広める」の創立スローガンは「仕事」との両立する難しさもありますが、年二回の公演は欠かさず実現してきました。ひとえに劇団を創ってきた諸先輩方、そして支えていただきましたお客さまのおかげです。この記念すべき年に素晴らしい賞をいただきましたこと、60年のすべての関係者みなさまに感謝と御礼申し上げます。



撮影:速水仁



撮影:速水仁

芸術祭新人賞 (関東参加公演の部)

花村 想太

東宝株式会社「ジャージー・ボーイズ」における演技

「天使の歌声、フランキー・ヴァリ役に必須である、難易度の高いハイトーン・ボイスと歌唱法を体得した、待望の才能。前半では、あどけなさの中に天性の輝きがこぼれ出し、後半では、不幸に見舞われ翳りが見える孤独な中年スターの姿を、確かな演技力で伝えた。重圧にも似た期待に応えたことで、更なるステップアップが期待できる。

<受賞者コメント>

この度、文化庁芸術祭新人賞という栄誉ある賞を頂き、本当に感謝しております。そして同時にたいへん身の引き締まる思いでございます。僕はこの『ジャージー・ボーイズ』フランキー・ヴァリ役を演じるにあたり、本当にたくさんの方々のお力をお借りしました。全出演者、全スタッフ、家族、友達、そして全てのお客様と共に頂いた賞だと実感しております。何よりこの作品へと僕を導いてくださったフランキーを、初演からずっと演じておられる中川晃教さんに大きな感謝を伝えたいです。この作品は実在する大人気グループ、フォーシーズンズの栄光と挫折を描いた物語です。僕もDa-iCEというグループに在籍しており、渋谷の小さなライブハウスからスタートし、お客様も10人くらい、初めての地方でのライブは1人という状況でした。そんな境遇に恐縮ながらも少し似ているなど感銘を受けていたことが、この作品をより身近な感覚でお届け出来た要因のかなと思っています。この賞に慢心することなく糧として、また一つ一つ階段を登らせて頂きたいと思っております。改めまして、本当にありがとうございました。



芸術祭新人賞 (関西参加公演の部)

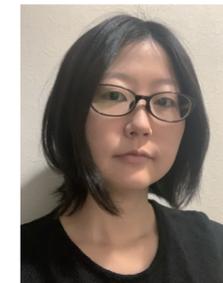
山本 彩

空の驛舎「花を摘む人」の作

舞台は緑深いダム湖周辺。湖の底には村が沈んでいる。旅する者、過疎にあらがう者、村を出た者…。様々な背景を持つ4組の人々の会話が展開し、昼顔とひまわり、2種類の花のイメージが色鮮やかに立ちのぼる。研ぎ澄まされた簡潔な言葉で、生と死への思い、故郷の記憶など、深い人間感情を描き出した筆致は、今後の活躍を大いに期待させた。

<受賞者コメント>

「花を摘む人」は、とても幸福な戯曲です。コロナ禍により一度は上演を諦めました。それが第28回 OMS戯曲賞大賞を頂戴し、2022年には高知でショープロジェクト、大阪で空の驛舎により上演することができました。そして、この度の文化庁芸術祭賞新人賞受賞、身に余る光栄でございます。多くの方のお力添えがあったからこそです。本当にありがとうございました。これからも、戯曲を書き続けていきます。



芸術祭大賞 (関東参加公演の部)
公益財団法人読売日本交響楽団
「第622回定期演奏会」の成果

桂冠指揮者シルヴァン・カンブルランが登場した本公演は、ドビュッシー2曲、巨大編成のヴァレーズ、10月に急逝した一柳慧の新作「ヴァイオリンと三味線のための二重協奏曲」と20世紀から今日までを繋ぐ意欲的な選曲が光った。厳格さと洗練を備えた指揮で、明晰かつ色彩豊かな音楽を作り上げ、特にヴァレーズ「アルカナ」の多彩な音響を緻密にコントロールした演奏は圧巻であった。

<受賞者コメント：理事長 林 路郎>

この度は栄誉ある賞を頂戴し、大変光栄に存じます。当団は「クラシック音楽の振興と普及」を目的に創設され、音楽的な質の向上と幅広いレパートリーの開拓に日々取り組んでおります。本受賞に際し、とりわけカンブルラン氏と共に新しい作品へ向き合ってきた当団の歴史が、同時代の創作を支え、音楽とともに時代を拓くことに繋がるとの思いを、更に強くいたしました。また、一柳慧先生が自作の世界初演を前に旅立ってしまったことは当団にとって無念極まりなく、この場を借りて先生に深く御礼申し上げますと共に、ご冥福をお祈りいたします。



©読響 撮影=藤本崇



©読響

芸術祭大賞 (関西参加公演の部)
あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホール
フィリップ・グラス「浜辺のアインシュタイン」の成果

ミニマルミュージックの金字塔的な傑作の上演にあたり、極限に挑戦するような超絶技巧を駆使して、その本質的な美に迫る演奏を成し遂げた。特に、古典から前衛、室内楽から演劇分野まで、幅広い音楽に造詣の深い中川賢一氏を中心に結集した、管・弦・鍵盤楽器、声の音楽家たちの演奏が高く評価された。また、その歴史的に意義深い企画力に対しても高く評価された。

<受賞者コメント：音楽監督 中川 賢一>

文化庁芸術祭大賞という大きな賞を受賞することができ、演奏家、プロデューサー、全てのスタッフにとって大きな励みとなるとともに最大の喜びを感じております。この曲が時代背景として内包するベトナム戦争、核、第三次世界大戦の脅威は今の世界情勢と照らし合わせるとより意味深く思えます。また、人間が機械になるかのような超絶技巧の音形を繰り返し限界を超えたところに見える新たな世界を表現するために、長時間の個人練習、幾度と重ねたグループ練習、それをスタッフが丁寧に支えるという地道な努力を評価いただけたことも、これからの演奏家、スタッフにとって支えとなることと思えます。この身に余る賞に恥じない活動を我々もこれから切り拓いて参りたいと思えます。



芸術祭優秀賞 (関東参加公演の部)
高島 一郎
「高島一郎 箏 リサイタル1834 きはめたくたる」の成果

江戸時代の箏曲の主要ジャンルをたどった企画は考え抜かれていて秀逸。段物「みだれ」で若手の中島裕康と生き生きとした演奏を繰り広げ、手事物「末の契」では、三味線抜きの変則的な編成で、尺八の藤原道山と渡り合った。幕末新箏曲に想を得た自作「新千鳥」では自身の技巧を存分に発揮し、「秋風の曲」では、ピリオド楽器の古箏を用い、「五段砧」では師砂崎知子と息の合った合奏を披露した。

<受賞者コメント>

10年ぶりの参加に対し、二度目となる優秀賞を頂けますことは、私にとりまして何よりの励みとなりました。エントリーを済ませた後、この歴史ある芸術祭が今年度で終わるとの事を知り、大きな目標を失いかげそうにもなっていましたので感慨も一入でございます。振り返ればこの10年の間に、私にとりましては本当に、相当に、様々な出来事が起こり、その中の良いことも、そして悪いことも、それら全てが私の糧となってこの度の結果に繋がったのであろうと、多くの関係の皆様や起きた物事に対し心より感謝しつつ、今後も自分なりの箏(こと)の道をコツコツと歩んで参りたいとより強く思っております。



芸術祭優秀賞 (関西参加公演の部)
倉橋 容堂
「倉橋容堂 古典尺八リサイタル」における「八重衣」の演奏

尺八楽の古典曲のみのプログラム。前半は迫力と安定感のある尺八本曲3曲を聞かせた。また後半の三曲合奏「八重衣」は、長年の演奏経験の蓄積による錬られた解釈が秀逸であった。過度な表情づけに陥ることのない抑制された表現の中に、助演者との軽妙なやり取りが随所に散りばめられており、その円熟した芸が聴衆を魅了した。

<受賞者コメント>

このたびは思いがけずも、芸術祭優秀賞という栄誉ある賞をいただき、身が引きしめる思いをいたしております。長い人生を古典尺八音楽一筋に、来る日も来る日も同じことを繰り返してまいりました。成長のない人生だったように思われますが、少しばかり高いところにたどり着いたような気もいたします。今回の受賞で、その感を強くいたしました。とは言え、まだまだ五合目です。これから更なる高みをめざして、未知なる境地を求めて、また延々と同じことを繰り返します。私を育てていただいた先生がたに感謝いたします。



芸術祭新人賞 (関東参加公演の部)
日原 暢子
「日原藤花維柯 箏曲古典の会」の成果

「秋風の曲」の独奏、「歌恋慕」と「常世の曲」の“打ち合せ”の合奏、宮城道雄作曲「石清水」の箏と尺八の合奏、地歌「屋島」の三絃と箏の合奏という4曲から成るプログラムは、日原藤花維柯が学んできた流派の独自の伝承を尊重し、その特徴と魅力を十分に引き出す意欲的な内容であった。繊細な節回しを明瞭な発音でしっかりと歌い上げ、箏の響きには美しい輝きがあり、ほかの楽器とのバランスにも工夫があった。今後の活躍を大いに期待させる表現力と高い技量が示された。

<受賞者コメント>

歴史ある文化庁芸術祭音楽部門の新人賞という名誉ある賞を賜り、心より光栄に存じます。今日まで育ててくださった師匠はじめ先生方への一途な感謝の想いで演奏会を迎えることができ、誠に幸せでございました。ひとえにお導き支えてくださった方々のお陰と深謝申し上げます。今後も、奏でる音を通して社会における「芸術文化の真の役割」を全うできるよう、一音一音を磨き、より一層の精進をして参ります。



芸術祭新人賞 (関西参加公演の部)
中嶋 俊晴
「中嶋俊晴カウンターテナーリサイタル～Distanz～」の成果

ドイツ語で「距離」を意味する「Distanz」をテーマとしたリサイタルでは、バロックから現代までの様々な地域の作曲家の曲が採り上げられた。非常に考え抜かれたプログラミングで、いずれの曲でも深い解釈に基づき表情豊かに歌われた。とりわけ、演出も伴ったリームの「ヘルダーリン断章」の演奏は圧巻で、極めて高く評価されるリサイタルであった。

<受賞者コメント>

コロナ禍で歌う意味を見失いかけた時に、自身を励ましてくれた存在はまさに「歌」でした。そのかけがえのない存在と私自身との距離をテーマに開催したリサイタルは、これまでの演奏会の中でも特別なものでした。思い入れのあるリサイタルをこうして評価していただけたこと、大変嬉しく光栄に思います。今後の演奏生活も迷いと模索の連続かと思いますが、歌を追い求め、日々誠実に向き合っていこうと思っております。この度は誠にありがとうございました。



芸術祭大賞 (関東参加公演の部)

東京バレエ団

東京バレエ団「ラ・バヤデール」の成果

古典バレエ名作の、非の打ち所のない名演である。主演の上野水香は三角関係の愛憎に翻弄される古代インドの巫女＝バヤデールを神秘性といじらしさをもって造形し、恋人役の柄本弾、恋敵役の伝田陽美とともに迫真のドラマを描ききった。定評ある群舞にもさらに磨きがかかり、名場面「影の王国」では永遠を感じさせる霊的な世界を現出させた。



Koujiro Yoshikawa

<受賞者コメント：東京バレエ団 芸術監督 斎藤 友佳理>

このたび栄誉ある賞を賜り一同心より感謝申し上げます。「ラ・バヤデール」は2009年の初演以降海外でも上演し、バレエ誕生の地ヨーロッパで“純クラシックの作品”で高評を獲得することができた特別な作品です。5年ぶりの国内上演となった今回、海外公演を成功に導いた実力派から成長著しい若手の3キャストで、当団のダンサーの充実ぶりを日本の皆様にご覧いただけたことを大変嬉しく思っております。本栄誉は振付・演出ナタリア・マカロワの精神を継ぐ振付指導者の方々のご尽力のもと実現いたしました。今後もさらなる芸術的高みを目指し精進いたします。



Koujiro Yoshikawa

芸術祭優秀賞 (関東参加公演の部)

Co.山田うん

「Co.山田うん2022新作 In C」の成果

ミニマルミュージックの起点となったテリー・ライリーの記念碑的な楽曲を用い、緻密に構成された演出と独創的な動きを活かした振付、さらにそれを高い水準の技量とチームワークで踊りこなした12人のダンサーの演技が高く評価された。音楽のコンセプトと同じく65分間変化し続けて、最終的に祝祭感をもたらす洗練された舞台が優秀であった。



<受賞者コメント>

ダンスカンパニー設立20周年節目の年に優秀賞を戴き、大変光栄です。受賞は「In C」公演の評価ですが、私達にとっては、20年間の活動を通し、多くの人との多くの時間あってこそで、受賞は全ての日々に対してだと感じる事ができ、大変嬉しく存じます。全関係者ならびに評価して下さった皆様に心から感謝の意を申し上げます。混迷の時代だからこそ、おらかなCコード、ハ長調の音楽とダンスの融合を試みました。過去を抱擁し、現在地に立ち、未来へ半歩でも踏み出す力になれたらと願いながら、この度の賞を活力に、これからも力強い舞踊作品を発表していきたく存じます。



芸術祭優秀賞 (関西参加公演の部)

法村 圭緒

法村友井バレエ団公演「クレオパトラ ラ・シルフィード」におけるマジジの演技

「ラ・シルフィード」の物語全体を支配する存在である魔女マジジ役を、的確で深みのある演技、大きな存在感、迫力を持って踊り、作品全体のレベルを引き上げた。この役は、世界中で古典バレエの主役を重ねたスターダンサーがベテランになって挑んで名演と語られる例が多々ある。法村も主演を重ねた経験を経ての今回の名演。振付を担いながらの活躍だ。



©尾鼻文雄 (OfficeObana)

<受賞者コメント>

バレエの舞台は、一人の努力で成り立つものではないです。多くの方々よりご尽力賜り、この度このような素晴らしい賞を授かりました。舞台を支えてくださった素晴らしいダンサーの皆様、制作スタッフの皆様、舞台スタッフの皆様、指揮者の江原先生、関西フィルハーモニー管弦楽団の皆様、愛する家族、そしていつも応援して下さるお客様、携わってくださったすべての方に感謝を申し上げます。偉大なバレエの先人達に最大の敬意を表します。



©尾鼻文雄 (OfficeObana)

芸術祭優秀賞 (関西参加公演の部)

上方舞山村流

「山村流双葉会」の成果

動物を題材にした演目尽くしの番組で、蟹や狐、鼠をも「振り」によって巧みに描き出す日本舞踊の面白さを示した。個別には「狐の嫁入り」で山村若は目出度さを醸し出しつつ狐の嫁入りの様を好演。「猿蟹昔物語」では山村侃が猿や蟹を的確に舞い分けて滑稽な物語を紡いだ。流儀内に次代の上方舞を担う人材が育っていることを印象付けた。



<受賞者コメント：山村 若>

この度は、身に余る賞をいただき、誠に光栄でございます。文化庁芸術祭賞は、父・友五郎も頂き、一つの目標としていたものでもございました。会を引き継ぎ、昔の大阪らしいものと考えて披露した演目で頂けたこと、大変嬉しく思っております。まだまだ続くコロナ禍の中、様々なものが戻ってきておりますが、まだまだ昔のようには参りません。そのような中でも、これからは頂いた賞を励みとして、精進させていただきたいと思っております。



芸術祭新人賞 (関東参加公演の部)

工藤 朋子

工藤朋子フラメンコリサイタルvol.3「時と血と地と」の成果

日本の民族の大地に立脚したフラメンコとしての津軽との融和が見事であった。工藤の原点に立ち返って、自らの血を見直してみようという試みが成功した舞台だった。カンテをはじめ、パーカッションはもちろん津軽民謡の浅野祥やパルマに至るまで良き共演者に恵まれてはいたが、何よりも工藤の津軽とフラメンコにかける熱い情熱が観客の心を打ったのは間違いない。



撮影・竹下智也

<受賞者コメント>

この度は、芸術祭新人賞を頂戴し、とても栄誉のあることと感動しております。この喜びを得ることが出来たのも、ひとえに応援して下さる皆様、関わって下さった全ての皆さまのおかげであると痛感しております。この場をお借りし、厚く御礼申し上げます。

『時と血と地と』
～悠久の“時”を胸に、“血”脈を感じ、土“地”に想いを馳せながら～
このテーマを胸に刻み、フラメンコを軸とし、新たな出会いにも胸を膨らませ、人生一路この道に愛を抱き続けてこれからも踊ってまいります。本当にありがとうございました。



撮影・川島浩之

芸術祭新人賞 (関西参加公演の部)

東野 祥子 「ANTIBODIES Collective New Creation / Performance in AWAJI 2022 Liminal」における構成・振付

昨年に続き、淡路島南部のDanto Tile工場を公演の会場としたANTIBODIES Collectiveは、今作で、その名の通り集合体の力を発揮した。そのパフォーマンスに対し、個人を表彰することは無粋であるが、団体の代表を務める東野祥子は、ダンサーたちへの振りうつしに限らない振付、すなわち辺地に多くのスタッフや観客を集らせ、繋ぎ、また広大な工場内を来訪者に回遊させる技を高めたと言える。その調整や誘導の術は、今日的な「振付」の意味や「振付家」の活動意義を伝えかつ広めるものとして、新たに評価されて良い。

<受賞者コメント>

この作品は、私達が昨年開拓した4000平米の広大な空きスペースにて、80名に及ぶ出演者/スタッフ/関係者、ダントーティル福良工場、南あわじ市の地域町内会など、多くの方々の協力を得て上演されました。私が代表で受賞するという事はおこがましいことではございますが、共同代表であり、構成・音楽監督を勤めるカジワトシオを始め、多くのアーティスト・ダンサーたちと共に長年培ってきたコレクティブ独自の「有機的な関係性とその可能性の実験としての創作」による1つ大きな成果として、『自由回遊形式』の演出方法の部分を評価いただけたことは、作品に関わった全員の惜しみない努力、探究が実を結ぶことができたことと実感し、光栄に感じております。今後も、ANTIBODIESはひとつの集合体として舞台芸術が社会に接続する意思を表すシンボルのようなものとして、私個人も振付家、ダンサーとして日々精進していく所存です。誠にありがとうございました。



photo by Toshio Komatsu



photo by 井上嘉和

令和4年度(第77回)文化庁芸術祭賞贈賞理由

大衆芸能部門

芸術祭大賞 (関西参加公演の部)

林家 菊丸

「第八回三代目林家菊丸独演会」の成果

女性を描くことに定評のある林家菊丸が「癩の合衆」「二番煎じ」「井戸の茶碗」という“侍の噺”三席で新境地を開拓。特に「井戸の茶碗」では、清貧な暮らしぶりの浪人、若き武士、正直者の屑屋を巧みに演じ分け、爽やかで温もりのある笑いを届けた。また、浪人の娘の心情をさりげなく織り込むなど、現代感覚にマッチした演出も光る。

<受賞者コメント>

今回、侍の噺を並べました。私が工夫を加えた部分の意図がそのまま受賞理由に反映されていたこと大変驚きました。なぜならケレンや仕掛けを駆使した演出ではなく、今のお客様が古典落語を聞いた時に抱きうる違和感を払拭すべく、登場人物の心理描写を何気なく表現したからです。そこに審査員の先生方が着目して下さったことが何より嬉しいです。48歳での大賞受賞は身に余る光栄で、今後さらなる高みを目指し精進して参ります。そして私の師匠(四代目染丸)もかつて大賞を受賞しました。伝統ある文化庁芸術祭の大賞を師弟で頂きましたことは大きな誇りです。心より感謝申し上げます。



芸術祭優秀賞 (関東参加公演の部)

林家 はな平

「ハヤシにのって～林家はな平独演会～」の成果

若手芸人の“押し芸”が幅をきかせる昨今、はな平の脱力した芸風は貴重である。特に「火事息子」は高評価を得た。噺の肝である親子の対面の場面ではしっとりし過ぎず、勘当中の息子をそばに呼ぶ際の父親の細やかなせりふ回しで、複雑な心情を描くことに成功した。小さな注文はいくつか議論になったが、将来性を感じさせる高座が評価された。

<受賞者コメント>

この度、文化庁芸術祭優秀賞を頂き誠にありがとうございます。真打になってすぐに受賞できたことに驚きはありましたが、二つ目時代に自分のやって来たことが実って大変嬉しく思います。コロナ禍において、高座が減り、落語をやる機会が少なくなった中で、色々な体験をしようと落語に直結しない活動に目を向けたことがこのような結果に繋がりました。これからも、噺の本質を大事にしながら、奇をてらわずに良い落語をすることを目指して精進して参ります。お客さま、師匠、おかみさんに、改めて感謝申し上げます。



芸術祭優秀賞 (関東参加公演の部)

春風亭 昇也

「春風亭昇也独演会」の成果

冒頭、兄弟子の真打昇進披露で番頭役をつとめた体験談を面白おかしく紹介し、その後「庭蟹」[引越しの夢][百年目]を「番頭」というキーワードで口演。三席それぞれ、構成・語彙・くすぐり・所作を含めて、流暢かつ丁寧に運び、高い技量を示した。とりわけ大ネタとされる「百年目」を、細部まで計算の行き届いた演出で聴かせてくれたことは、まことに稀有なことであった。

<受賞者コメント>

真打ち昇進して半年弱、新人賞を頂ければ御の字位に思っていたので、優秀賞を頂けたのは私としてはラッキーパンチとしか言い様がない。頂く賞の大きさに対してコメントが軽すぎるかもしれませんが、そこはご愛嬌。庭蟹、引越しの夢、百年目という番頭が主役の三席合せ技一本というところでしょうか。特に百年目は、大ネタでもありますが、自分が落語を聞きだすきっかけになった噺でもあるので、それでの受賞は感慨深さもひとしおです。受賞に恥じない落語家になる為に、より一層の精進をしていきたいと思っております。有難う御座いました。



令和4年度(第77回)文化庁芸術祭賞贈賞理由

大衆芸能部門

芸術祭優秀賞 (関西参加公演の部)

チキチキジョニー 「チキチキジョニー単独ライブ～年ごまかしてたり、クビになったりもしたけど～なんやかんやで20年」の成果

プロとしての初舞台から20年を記念する公演において、デビュー時のネタを含む漫才、コント芸などを盛り込んだバラエティに富んだ演目でその歳月を振り返った。満場の拍手喝采に目を潤ませる、その姿すら笑いに昇華する「人」としての魅力と、それだけに頼ることのない高い鮮度のネタとが同居する、充実のプログラムであった。

<受賞者コメント>

賞というものにほとんど縁がなかった私達がこんなすごい賞をいただけるなんて！本当に嬉しいです。いろんな人達に祝ってもらったり、喜んでもらったりすることで改めてすごい賞なんだと実感しました。この賞を作ってくれた方々、繋いで来てくださった方々に感謝致します。これで記録には残れたので、皆様の記憶に残れるようにもっともっと笑いを届けていきたいと思っております。私達に関わって下さっているすべての皆様ありがとうございます。これからもどうぞよろしくお願い致します。



芸術祭新人賞 (関東参加公演の部)

一龍齋 貞鏡

「一龍齋貞鏡修羅場勉強会」の成果

真打昇進間近という大切な時期に、講談の原点である「修羅場」に挑み、研鑽の成果を示した。「源平盛衰記・青葉の笛」は抑揚を抑えた深みのある読み口で。「三方ヶ原軍記・土屋三つ石畳の由来」は張り扇を響かせ勇ましく。緩急を生かした切れ味の良い高座は、昨春死去した実父で師匠の八代目一龍齋貞山にも届いただろう。

<受賞者コメント>

この度は、身に余る賞を賜りまして、誠に忝く、心より御礼申し上げます。師匠・八代目一龍齋貞山は、「講談の基礎、醍醐味である修羅場を常に稽古しなさい」と度々申しておりました。師匠も愛した「修羅場」で此の度受賞をさせて頂きましたことは、貞山の弟子として、講談師として、この上ない名誉でございます。ここで兜の緒を締め、更に精進を重ねてまいる所存でございます。今後とも末永くご指導の程を、何卒宜しくお願い申し上げます。



芸術祭新人賞 (関西参加公演の部)

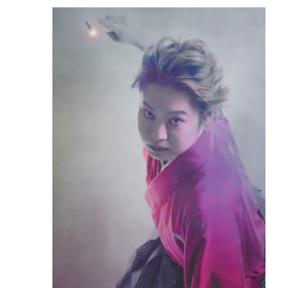
京山 幸太

「第二回京山幸太独演会」の成果

独演会では町田康の小説「パンク侍、斬られて候」を自身で浪曲化し、前編・後編に分けて口演。独特の世界観を持つこの物語に真っ向から立ち向かった。粗削りなところもあったが、仕草にも工夫を加え、テンポよく、聞きごたえのある熱演で聞くものを魅了した。浪曲への情熱と意欲に満ちた姿は今後のさらなる成長を期待させた。

<受賞者コメント>

この度は文化庁芸術祭の新人賞を頂きましたこと、大変光栄でございます。今回は町田康さん原作の小説「パンク侍、斬られて候」を浪曲に脚色させて頂いた浪曲版「パンク侍、斬られて候」を口演致しましたが、新作で受賞できたということを大変嬉しく思っております。独演会に関わって下さった全ての方に感謝致します。まだ浪曲に馴染みのない方にもアピールしていける様、古典も新作も尚一層精進して参ります。



令和4年度(第77回)文化庁芸術祭賞贈賞理由

テレビ・ドラマ部門

芸術祭大賞

日本放送協会

忠臣蔵狂詩曲No.5 中村仲蔵 出世階段

源孝志の円熟した脚本・演出に加えて照明や美術などすべてを職人技によって作り込み、実在する江戸時代の歌舞伎役者・中村仲蔵がまさに奈落から舞台へと這い上がる姿を高い完成度で活写した。主演の中村勘九郎ら歌舞伎役者の優れた身体表現と、歌舞伎に挑む出自の異なる俳優たちの熟練した演技の競演も見どころとなった。

<受賞者コメント：脚本 演出 源 孝志>

この物語の登場人物たちが生きた頃の江戸は、歌舞伎が飛躍的に発展した時期に当ります。当時ロンドンのウエストエンドと並び、世界屈指の演劇街であった日本橋の堺町が舞台です。この芸能のエネルギーに溢れた街で、芝居に魅せられた人々が繰り広げる群像劇を作ってみたかった。脇目もふらずその先頭を駆け抜けた中村仲蔵の成功譚が、見る人の閉塞感を打ち払ってくれる事を祈って。参加してくれた演者とスタッフの皆さんを誇らしく思います。



芸術祭優秀賞

日本放送協会

よるドラ「恋せぬふたり」

LGBTQ関連のテーマを扱った諸作品が見受けられるなか、そのテーマを概念的に掲げるのではなく、生活の些細な細部の描写を丹念に積み重ねることで、幅広い視聴者に自然に理解・共感できるものになっている。そのことが本作を単なる啓蒙ではない、人生の多様性を見つめ直す「普遍性」のあるドラマに到達させている。

<受賞者コメント：ディレクター 押田 友太>

「恋愛する＝幸せを描くドラマばかりだと、自分の存在が否定されているように感じる人もいます」このドラマが生まれるきっかけになった言葉のひとつです。取材に協力してくれた皆さんの言葉をもとにして私たちが大事にしてきたのが「自分の幸せは自分で決める」というテーマでした。「恋愛する人、しない人」色んな生き方があって、色んな人がいる。そこに理由なんてない。そんな当たり前なことを突きつけられた制作過程だったと思います。ドラマだからしょうがないではなく、ドラマだからできることをこれからもやっていきたいと思っています。この度は本当にありがとうございました。



芸術祭優秀賞

株式会社WOWOW

連続ドラマW いりびと-異邦人-

主人公が卓抜した審美眼を持つ美術収集家という設定ゆえに、劇中絵画の「本物感」が確実に問われてしまうドラマだが、この難題に果敢に挑戦し大きな成果を上げた。物語構成にはやや既視感があったが、絵画作品群の見事な仕上がり、それに見合った美術・照明・撮影・編集の連携による繊細な映像演出の説得力で独創的な表現に到達した。

<受賞者コメント：コンテンツ戦略局コンテンツ戦略部 オリジナルドラマ統括 武田 吉孝>

絵画芸術をテーマとした作品で、他にもない芸術祭に評価を頂けたことは至上の喜びです。自局ドラマの新境地開拓を目指していた時、原田マハさんの原作が運命的なインスピレーションを与えてくださいました。若き頃に米国で研鑽を積んだ萩原健太郎監督を柱とした東京のスタッフ、物語の舞台を知悉する東京都撮影所のスタッフ、裏表の協力者など、古今東西が渾然一体となり表現の面白みを目指した制作の場には、文字通り温故知新の感動がありました。この栄誉を励みとし、多様な価値観と技術のめぐり逢わせとなる映像制作に今後一層尽くしていきたいと思っています。



放送個人賞

伊藤 沙莉

特集ドラマ「ももさんと7人のパパゲーノ」における演技

日常生活のモラルによってどうしようもなく追い詰められていく絶望。伊藤沙莉はこの作品で、その動揺と苦悩をこれ以上なく的確に表出した。同僚や家族や友達や恋人を前にして平静を装う表情のこぼりなど、伊藤が見せる日常下の気持の移ろい自体が、テーマ「パパゲーノ」を体現している。

<受賞者コメント>

この度は、この様な賞を受賞させて頂き本当にありがとうございます。受賞のきっかけとなったドラマ「ももさんと7人のパパゲーノ」は試みとしても撮影の仕方としても自分自身初めての感覚や経験の多い作品でした。ももさんのロードムービーではありますが私個人としても何か見え方や価値観が変わったり刺激されたりしたとても貴重で大切な作品です。そんな作品をきっかけにこの様な賞を頂けたこと、本当に心から嬉しく有り難く思っています。これからも自分自身の成長と共に役に寄り添って一緒に生きていけるようお芝居を楽しんでいきたいと思っています。



令和4年度(第77回)文化庁芸術祭賞贈賞理由

テレビ・ドキュメンタリー部門

芸術祭大賞

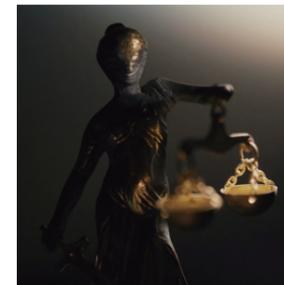
日本放送協会

BS1スペシャル「正義の行方～飯塚事件30年後の迷宮～」

1992年に福岡県飯塚市で2人の女兒が殺害された「飯塚事件」。犯人とされた男性の死刑執行は2008年だった。しかし、えん罪を主張する再審請求が何度も提起され、事件をめぐる動きは現在も続いている。元警察官、弁護士、新聞記者など立場の異なる人たちの証言を検証しながら、事件の全体像と司法の在り方に迫った秀作だ。

<受賞者コメント：ディレクター 木寺 一孝>

番組は「えん罪か否か」がテーマではありません。こだわったのは事件の当事者それぞれの〈真実〉と〈正義〉。立場の異なる人たちの考えを多角的に取材し、双方がぶつかり合う様子をそのまま提示したいと考えました。飯塚事件は決定的な証拠や自白がない中、状況証拠を集めて死刑判決が下されました。執行された今となっては本人に疑問点を質すことすらできません。自分ならどう判断するか…番組を通して人が人を裁く重さを体感してもらうことが番組のねらいです。受賞によって飯塚事件と司法のあり方について思いを馳せるきっかけになればと願っています。



芸術祭優秀賞

琉球放送株式会社

還らざる日の丸～復帰50年 沖縄と祖国～

復帰50年を迎えた沖縄において、日の丸は「忌まわしい戦争の象徴」から「復帰への憧れと希望の象徴」へ、更に「裏切りの象徴」へと変遷した。その歴史を辿ったうえで、今年の式典と50年前の式典を並べて見せた構成に説得力があった。既視感のある素材も多いが、それこそが未だ本当の「復帰」が果たされない証左だと訴えているようだった。

<受賞者コメント：報道制作部 報道番組担当専任部長 野沢 周平>

歴史と栄誉ある賞を賜り、驚いております。復帰50年という節目を、沖縄はなぜ祝えないのか。何がどう歪んでしまっているのか。日の丸をひとつの視点に、沖縄が辿った歴史や、祖国・日本との出来事を丹念に追っていけば、その答えが浮き彫りになる。そうした思いで番組制作に臨みました。目新しい事実などはありませんが、翻弄され続けてきた沖縄の姿を、節目の年に番組を通して伝えられたことに意義を感じています。取材にあたり、知花昌一さんには長時間のインタビューや、遠隔地への同行など、多大なるご協力を頂きました。改めて感謝申し上げます。



芸術祭優秀賞

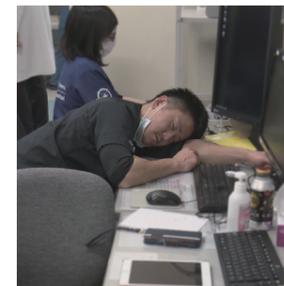
東海テレビ放送株式会社

はだかのER 救命救急の砦2021-2022

断らない医療を標榜する病院の救命救急センター、通称「ER」の現実にも迫るなかから現場の医師そしてER医療が抱える葛藤を描き出した。本来、映像は多義的だ。撮影された映像には現場の様々な情報が含まれている。これをナレーションによって一義的にしないことで、現場のダイナミズムやリアリティを賦活させた。日本のテレビドキュメンタリーの映像表現を一歩先に進めた作品である。

<受賞者コメント：報道部 ディレクター 足立 拓朗>

鼻の中のドングリを取り、時には酔っ払いの相手もする。ER医たちの日常は、重傷患者を鮮やかに救うドラマでの姿とは随分異なります。しかし彼らは症状の重さに関わらず全ての患者に真剣に向き合い、そこにプライドを持っています。今回の取材で、ERが地域にとって、そして高齢化の日本でいかに大事か知りました。一方、その役割がコロナにより制限を余儀なくされた上、救急医療の歴史の浅さもあり、ER医たちの置かれている立場は必ずしも満足いくものになっていないことも分かりました。この作品が、これからの地域医療の在り方やERの意義について考えてもらうきっかけとなれば幸いです。



芸術祭優秀賞

株式会社 BS-TBS

通信簿の少女を探して ～小さな引き揚げ者 戦後77年あなたは今～

ネット通販で購入した本に挟まっていた戦後間もない頃の通信簿。最優秀の成績だが、クラスの中でやや浮いた印象の一人の少女を探し始める導入はスリリングだ。足跡をたどる旅を通して大陸からの引き揚げ者の運命と、敗戦を挟み180度変わった歴史の断面が浮かび上がる。戦争を考えさせる人間ドキュメントとしてとても興味深く、意義深い番組となった。

<受賞者コメント：コンテンツ編成局 プロデューサー 初瀬川 啓太>

戦争というものが人々の暮らしに何を引き起こしていったのか、たった一枚の通信簿から導き出された女性の人生は、私たちの身の周りにまだまだ語られずにいる物語があることを教えてくれました。次の世代に戦争を考えるきっかけを少しでも与えることができたとしたら嬉しく思います。少女探しの旅は全く先が見えないところからスタートしましたが、粘り強く取材し、丁寧に交渉を続けた句坂ディレクターの強い思いが、この栄誉ある素晴らしい賞をいただける作品へと結実させました。ご協力いただきました、通信簿の少女、ご家族、皆様に感謝申し上げます。



芸術祭大賞(ドキュメンタリーの部)

株式会社中国放送

生涯野球監督 迫田穆成 ～終わりなき情熱～

迫田監督の人生をスリリングに描き、参加番組の中で特に引き込まれた。6歳で被爆し広島商業時代に甲子園制覇。同高監督として1973年に優勝。当時あの怪物といわれた江川投手を2安打で攻略して名将と称される。83歳の今も生徒数150人の県立竹原高校野球部を指揮する。彼の卓抜とした世界観、野球観を巧みな構成と編集で描いた傑作。

<受賞者コメント：アナウンサー 坂上 俊次>

戦前の広島を知り、復興期に野球で地域に元気を与えた83歳の甲子園優勝監督。取材を進めるほど、その「創意工夫」や「ポジティブシンキング」は現代に通じると確信を深めた。それだけに、この番組が評価を受けたことは、光栄であり、野球の力を再確認させてくれるものだった。今なお、現役監督にしてYOUTUBERである迫田穆成氏の言葉が多くの人に触れられることを切に願う。制作にあたって「創意工夫」に努めたが、迫田氏の65年前の音声社内にあったことは先人に感謝したい。同時に、創立70年を迎えた弊社の歴史を誇りに思う。



芸術祭優秀賞(ドキュメンタリーの部)

山形放送株式会社

鉄格子に顔押しつけて 21枚に刻み込んだ「抵抗」

ローマ字教育によって誰もが平等に読み書きできる社会を目指していたが、戦時下には許されなかった。獄中で言論弾圧に抗い続ける斎藤秀一の反骨の生きざまを朗読劇で表し、軍国主義の愚かさを伝えている。ウクライナ侵攻に伴うロシアの情報統制につながる現代への警鐘ともなっており、平和の意義を再認識させられる作品。

<受賞者コメント：山形放送酒田支社 伊藤 翼>

斎藤秀一が獄中で文字を刻んだ葉の包み紙を初めて目にしたとき、信念と志を貫き、抗い続けた彼の生き様に衝撃を受けました。国際社会に目を向ければ、国家による言論弾圧がいまも繰り返されている現実があります。取材で出会った齢100歳になる秀一の教え子や朗読劇に出演した女子高校生も、秀一が生きた時代にいまの時代の現実を重ね合わせていました。意見の異なる他者への寛容と自分の信条を守る強さが私たちに求められていると感じます。31年の短い生涯だった言語学者・斎藤秀一の生き様を今後もさらに掘り下げていきたいと思ひます。



芸術祭優秀賞(ドキュメンタリーの部)

株式会社ニッポン放送

ニッポン放送報道スペシャル あの日の「誓い」から10年・始まった共生社会への挑戦!

視覚障害を持ちながら10年前の誓いを胸に中学校の英語教師として教壇に立った女性。全盲の教師に最初戸惑う生徒たちだったが、障害を感じさせない実直な言葉と明るさで信頼関係を築いていくプロセスが丁寧に描かれている。取材を継続してきたスタッフの熱意を感じる。「共生する」とはどういうことか、理屈を超えた主人公の志が胸を突いた。

<受賞者コメント：プロデューサー 遠藤 竜也>

視覚障害を持つ小椋汐里さんをテーマにした番組では、平成30年度の芸術祭で大賞を頂き、それに続く受賞となりました。小椋汐里さんには、東日本大震災の年に行われた視覚支援学校主催の弁論大会で上村貢聖さんが初めて出会い、それ以降取材を続けております。「明るく前向きにまずは行動」をモットーにしている彼女はまさに共生社会の体現者、生徒たちに障がい者の存在を知って欲しいという思いで体を張って生きています。多くの方に彼女のことを知って欲しいという願いを持って番組制作を続けてきました。最後の芸術祭で賞を頂いたことは大変光栄で、感謝申し上げます。



芸術祭優秀賞(ドラマの部)

日本放送協会

FMシアター「琥珀のひと」

宇都宮放送局制作の「琥珀のひと」は、原発事故の放射能の影響で栃木の山林、川、湖まで汚染され仕事を失った人たちが、その不条理な中でどう生きて行くか、問う作品だ。カエデの森で、メープルシロップを作り孤高に生きるモーリー(石橋蓮司)を訪ねて来る1人の女子学生(志田彩良)が織りなすドラマは、前半がやや冗漫ではあったものの、後半に入り会話の面白さで聴く者を魅了し、その問いかけを深く突きつけた。地方局からの発信に拍手を送りたい。

<受賞者コメント：NHK宇都宮放送局 ディレクター 内藤 朝樹>

「山菜やキノコ、ほんとうは食べさせてあげたいんだけど…」日光で聞いたこのひとことが制作のきっかけでした。原発事故により、あるがままの自然や恵みを受受できない厳しい現実。市場や経済合理性のレベルからは小さくみえても、現場に足を運ぶと圧倒的に大きな生活・地域文化への影響が目の前に立ち現れました。福島や原発の影響のある地域に定住していない無責任な存在のわたし。番組制作でこの問題を考えて続けたいと思ひます。



芸術祭大賞

有限会社日本アコースティックレコーズ

人間国宝 野村峰山 初代中尾都山～都山流尺八楽の軌跡～

明治4年の普化宗廃止後、混沌とした尺八界で頭角を現し大流派を確立した初世中尾都山。彼の本曲全曲のCD化と音楽的な分析をも試みた意欲的な解説および数種の楽譜校合を経た五線譜は、都山流本曲の全貌を明らかにし、その伝承のみならず、西洋音楽の導入によってダイナミックに変動した日本近代音楽史の研究に大いに資するものである。

<受賞者コメント：代表取締役 平沼 徳人>

この度は賞を戴き心より感謝申し上げます。本作品は野村峰山氏が流祖中尾都山の長年の研究の成果と日頃の研鑽によって具現化された6回の演奏会の記録を再編し、研究資料と考察をまとめたもので、門人の方々にはバイブルの一つとなっているものと思います。そしてまた、時代背景が都山音楽にもたらした影響を示したこの作品が、これからの音楽教育を考える一助となる事を切望致します。



芸術祭優秀賞

株式会社ソニー・ミュージックレーベルズ

藤倉大:ピアノ協奏曲第3番「インパルス」ほか

小菅優のピアノ独奏が冴え渡る録音で、ことにラヴェルでは音楽を雰囲気流さず、オーケストラともども一字一句たどりながらも、自然な息遣いをけって失わない演奏がみごと。小菅のために書かれた藤倉作品は、楽想が次々とめどもなく湧いてくる感触で、屈託なく一陣の風のように音楽が過ぎ去っていく。その軽みが本領。

<受賞者コメント：小菅 優>

この度はとても光栄な賞をいただくことになり、大変嬉しく思います。BBC交響楽団との初共演、同じ年の藤倉大さんの「インパルス」の初演以来約4年間ずっと心の中で温めてきたプロジェクトでした。大好きなラヴェルの協奏曲と大さんの新作、この二つの素晴らしい作品と共に成長できた時間、そしてたくさんの方々のかけがえのない愛情とサポートがあったからこそ、この録音が実現できました。その気持ちが伝わったかのように、賞という形でこの録音を評価していただくことは大きな励みになります。心より感謝申し上げます。これからももっと人間として、音楽家として自分を高めていけるよう、努力し続けたいと思ひます。



芸術祭優秀賞

株式会社ソニー・ミュージックレーベルズ

藤田真央 モーツァルト:ピアノ・ソナタ全集

平成10年生まれ藤田真央が録音したモーツァルトのピアノ・ソナタ全集は、自発性に満ちた音楽的感興が、独自のモーツァルトの世界を醸成している。この恐いもの知らずとも評せられる奔放で果敢な音楽作りは、若き藤田の唯一無二の記念碑的な演奏ともなっている。日本人がモーツァルト解釈の新しいページを拓いた画期的録音だ。

<受賞者コメント：藤田 真央>

この度は文化庁芸術祭優秀賞という身に余る賞を頂き、誠にありがとうございます。驚きや嬉しさと同時に背筋の伸びる思いであります。賞をいただいたモーツァルトのピアノ・ソナタ全集は、ベルリンのソニー・クラシカルチームと長い時間をかけて録音した、思い出深い作品です。特にプロデューサーのフィリップ・ネーデルはいっさい妥協することなく、私の理想とするモーツァルトの世界観を具現化するために、意見を何度も交わし支えていただきました。今の若い時期にこのような作品に取り組めたこと、そして評価していただけたことに感謝しております。本当にありがとうございました。



芸術祭優秀賞

株式会社フォンテック

ヤコブ・ファン・エイク 笛の楽園Vol.8

一昨年、若くして亡くなった江崎浩司の、いわばライフワークとも言えるシリーズの完結篇。シンプルなりコーダー、およびそれに類する楽器から、めくるめく音楽が溢れるように出てくる魔法のようなアルバム。またそれに興じる演奏者の喜びが、曲のそこそこに見出され、聴き手の心をも愉しく豊かにしてくれる。これぞ笛の醍醐味。

<受賞者コメント：プロデューサー 古谷 達也>

この度は、栄誉ある賞を賜りまして、お礼申し上げます。当方は2021年12月に急逝された江崎浩司氏の最後の録音で、ヤコブ・ファン・エイク、笛の楽園全集の最後の1枚です。この曲集は150曲におよぶ大作であるため、全曲録音は大変少なく、その資料的価値は今後も変わらないものと思ひます。なにより、江崎氏の闊達な演奏と、多数の楽器を吹き分ける独自のスタイルが、時代を超えて笛の楽園の魅力を保ち続けてくれると思ひます。このような、素晴らしい作品を残してくれた江崎氏に感謝すると共に、レコード会社として永く聴いていただけるよう尽力する所存です。

